



JACET通信

社団法人 大学英語教育学会

November 2009 The Japan Association of College English Teachers

No.171

【第48回全国大会特集号】

大会をふりかえって

西堀 ゆり (大会委員長、北海道大)

全国から700名を超える会員の皆様をお迎えし、成功裡に大会を終了する事ができ、これ以上の喜びはありません。大会テーマを具体的で明確なメッセージにするという目標を掲げ、大会運営委員、実行委員の皆様をはじめ関係各位に多大のご支援を頂きました。ここに深く御礼申し上げます。

本大会は「インターネット全盛時代の大学英語教育はどうあるべきか」を取り上げ、共通言語「英語」の役割を再認識する機会としました。劇的に変化するコミュニケーション能力と教育のグローバル化に対し、今後の指針を求めて、3日間に亘って真摯な議論を展開しました。

具体的にどのような新しいカリキュラムや方法論の変革が行われたのか、成功例から失敗例まで、多彩な取組みと研究成果を国内外から集めました。基調講演、特別講演、招待講演、大会シンポジウム、研究論文・シンポジウムの発表、ポスター発表、私の授業、支部企画「変わる大学英語」ポスター発表と、JACETの総力を集めての大会となりました。会員諸氏には貴重な情報共有の機会となった事と思います。

本大会の新機軸として、大会テーマを目に見える形で発信するという取組みを行いました。Mark Warschauer先生の基調講演は、16時間の時差を克服して、カリフォルニアから遠隔同時中継で行い、質疑応答も行いました。鮮明な画像と同時に会員諸氏は驚かれた事と思います。北海学園大学のご理解と情報担当の技術職員の皆様のご尽力、また、日立ハイテクノロジーズ社のLifeSize機材提供とサポートご支援に深く感謝申し上げます。大会シンポジウムでは、初めてインドからAmol Padwad先生をお迎えし、韓国、マレーシア、日本を加えて、その取組みと実情を



西堀ゆり 大会委員長

報告して頂き、討論を行いました。支部企画としては、全国54大学の英語教育を一同に集めて、市民公開ポスター発表を行いました。この会場には260名にのぼる来場者があり、熱気溢れる交流となりました。

大会テーマに込められた意味もまた目に見える形になりました。それは、共通言語英語の「共通性」が個々の文化の「独自性」を埋没させてはならないという願いです。言語の死は文化と民族の滅亡をもたらし、一度死滅した言語を蘇らせるのは至難の技です。ポーランドの人類学者プロニスワフ・ピウスツキー(1866-1918年)が録音した「ろう管」を工学的に再生・解読し、樺太アイヌの言語と文化の再生に成功された朝倉利光学長(北海学園大学)の基調講演は、この問題を私達にじっくりと考えさせる時間を与えてくれました。会員諸氏には、英語教師が忘れてはならない大きな、例えようもない程大きな課題に思いを馳せて頂く機会となった事と思います。

本大会を契機に、国際交流新時代の「叡知」が得られるようにと、2年がかりで大会準備を行った北海道支部の実行委員・会員諸氏と共に切望して止みません。

(文責 西堀ゆり)

◆会場校として◆

上野 之江

(大会実行委員長、北海学園大)

◆大会報告◆

浅岡 千利世

(大会運営委員長、獨協大)

第48回大学英語教育学会全国大会は、2009年9月4日(金)・5日(土)・6日(日)の3日間、「国際交流『新』時代における大学英語教育カリキュラム刷新」という大会テーマのもと、北海学園大学にて開催されました。発表件数は北海道支部特別企画「変わる大学英語」における56件を含めると合計170件となり、大会への参加は716名、支部企画へは一般市民参加者を含めて250名以上の参加者を得て、盛会のうちに幕を閉じることができました。

大会テーマに沿って基調講演、招待講演及び全体シンポジウムが行なわれ、国際化・IT化が急速に進む時代に適合するような大学英語教育カリキュラムの在り方について考える機会となりました。また支部企画では大学英語教育がどのように変化しつつあるか多くの大学の事例を通して理解することができました。更に特筆すべきは、2011年度の第50回記念国際大会に向けて英語による発表数増加が全国大会における課題の1つでしたが、今大会では研究発表部門において英語での発表を原則としたためか、研究発表のみならず全体的に英語での発表が例年より多く見られたことでしょう。

最後に大会の準備にあたられご尽力された西堀ゆり大会委員長、上野之江実行委員長をはじめとする大会実行委員の先生方、大会運営委員の先生方、本部事務局職員の方々々に心よりお礼申し上げます。(文責 浅岡千利世)

第48回大学英語教育学会(JACET)全国大会は9月4日、5日、6日の3日間にわたって、北海学園大学(札幌市)で開催されました。参加人数は716名でした。全国各地から大会に参加された会員の皆様に心からお礼を申し上げます。今回大会はカリフォルニア大学との遠隔講演、大会第3日目の北海道支部企画市民交流イベント「変わる大学英語」、独立採算の懇親会等新しい試みがありました。これらすべてを大きなトラブルも無く終えることができ、ご尽力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

支部企画の実践報告に4件、ポスターセッションに54件もの発表ご参加を頂き、会員の皆様のご協力に感謝致します。全国の大学英語カリキュラムを一同に集めて情報発信を行うこの企画は、JACET ならではの社会貢献の場となりました。日曜の午前9時開始にもかかわらず実践報告では立ち見が出ました。12時までの3時間に会場を訪れた会員、札幌市民、教育関係者、中・高校生は260名を越えました。関係者の熱意を感じるイベントでした。

第2日目の懇親会には250名ものご参加を頂き、感謝に耐えられません。赤字を出さない、音響をよくする、ご満足のいく料理でもてなす、を旗印に事業部会が頑張りました。おかげさまで盛況のうちに幕を閉じることができました。

「成功は十分に準備した者に訪れる」を合言葉に、約2年間に及ぶ準備期間を取りました。準備委員会として7回、実行委員会となって7回の打ち合わせを重ねました。多くの週末、早朝を犠牲にして頑張った実行委員に感謝します。また、常に迅速で正確な指示を与えて下さった新旧全国大会運営委員長と運営委員会に感謝をこめて大会のご報告と致します。(文責 上野之江)

2009年度 JACET 会員総会議事録

笹島 茂 (代表幹事、埼玉医科大)

日時：2009年9月4日(金) 11:10-12:10
場所：北海学園大学豊平キャンパス 7号館D20

配布資料：『社団法人大学英語教育学会：2009年度会員総会』

壇上(以下敬称略)：森住衛会長(桜美林大)、神保尚武副会長(早稲田大)、岡田伸夫副会長(大阪大)、田中慎也専

務理事・事務局長(元文教大)、寺内一常務理事(高千穂大)、見上晃財務担当理事(拓殖大)、笹島茂代表幹事(埼玉医科大)、尾関直子副代表幹事(明治大)、渡辺敦子副代表幹事(国際基督教大)

司会：笹島茂(埼玉医科大)

記録：尾関直子(明治大)、渡辺敦子(国際基督教大)

確認：森住衛(桜美林大)、笹島茂(埼玉医科大)

開会

I. 森住衛会長挨拶

昨年8月15日に社団法人化され1年が経過したこと、森住会長は来年3月にはその任期を終え、4月からは新会長のもと新体制となること、会員総会は、社員総会とは異なり議決権はないが、会員からの意見聴取という非常に重要な場であるので活発な意見を願いたい旨の要請があった。

続いて、次の議題が各担当者より報告された。

II. 議題

1. 総務関係

寺内総務担当理事より以下の報告があった。

1.1 会員状況

1.2 2009年度事業計画・予算・人事

1号事業：大学英語教育及び言語教育関連の研究理論の発表及びその実践結果の報告のための大会、セミナー等の開催

(1) 全国大会の開催

(2) セミナーの開催

2号事業：紀要、学会誌等の出版物の刊行

(1) 『紀要』の刊行

(2) 『JACET通信』の刊行

(3) 『大学英語教育学大系』全13巻の一部刊行（2012年度までの短期事業）

3号事業：大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関の実践活動に対する表彰及び協力

(1) 大学英語教育学会（JACET）賞の表彰（学術賞・新人賞・実践賞）

(2) 関係学術団体への派遣

4号事業：大学英語教育及び言語教育関連の理論及びその実践方法に関する調査・研究

(1) 全国レベルの調査研究

(2) 専門分野別の研究会活動（毎年継続事業）

5号事業：前各号に掲げるもののほか、この法人の目的を達成するために必要な事業：定例及び必要な場合には臨時の、理事会、総会、運営会議、運営委員会、特別委員会等を開催し、必要な事業について検討を行う。

2. 財務関係

見上財務担当理事より、2008年度収支決算及び収支計算書の報告があった。また、法人化以前（2008年4月1日～8月14日）の決算報告が承認された。

3. 役員改選関係

寺内総務担当理事より今後役員全体の改選の予定などの説明があった。

4. 今後の中長期構想

森住会長より今後の中長期構想についての次の説明があった。

(1) 今後の公益化への考え方

(2) 関係諸分野・諸機関との連携の強化

(3) 会員増強

(4) 英語能力試験の開発

(5) 大学英語教員の養成と身分保証

(6) 事業・活動のさらなる見直し

・大学英語教育学会（JACET）賞

・全国大会

・紀要

・セミナー事業

・研究会

・JACET通信

・国際交流

(7) その他

5. 特別委員会および特別事業に関する件

各担当役員より、以下に関して説明があった。

(1) ICT特別委員会

(2) 50周年記念事業（刊行・国際大会・記念誌・寄付）

①刊行事業

②国際大会

③記念誌

④寄付事業（JACET創立50周年寄付事業（案）、目標額400万円）

(3) 第三次実態調査委員会

(4) 第2次授業学研究委員会（リメディアル教育を中心に）（2010年度より開始）

6. その他

小池特別顧問より森住会長への感謝の言葉があり、「英語学大系」の刊行事業の価値を評価しているのでさらに質の高い内容を目指していただきたいとの要望と、会長選挙を控えているこの時期に各会員はその責任を感じて活動してほしいとの意見が添えられた。

開会

（文責 笹島 茂）

大学英語教育学会 第47期 収支計算書

(2008年4月1日から2008年8月14日まで)

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
① 事業収入			
印税・原稿料収入	0	1,313,543	△ 1,313,543
会費収入	0	18,136,000	△ 18,136,000
書籍販売収入	0	93,700	△ 93,700
雑収入	0	85,047	△ 85,047
事業収入計	0	19,628,290	△ 19,628,290
② 雑収入			
受取利息収入	0	124,671	△ 124,671
事業活動収入合計	0	19,752,961	△ 19,752,961
2. 事業活動支出			
① 事業費支出			
通信費	0	604,982	△ 604,982
印刷費	0	297,279	△ 297,279
研究活動費	0	769,185	△ 769,185
支部費	0	2,656,350	△ 2,656,350
事業委員会	0	9,660	△ 9,660
出張費	0	327,420	△ 327,420
会議費	0	926,648	△ 926,648
渉外費	0	106,145	△ 106,145
国際交流費	0	477,155	△ 477,155
ICT 特別委員会費	0	700	△ 700
50周年記念刊行事業費	0	278,080	△ 278,080
事業費支出計	0	6,453,604	△ 6,453,604
② 管理費支出			
人件費	0	3,564,741	△ 3,564,741
法定福利費	0	92,739	△ 92,739
退職金	0	1,196,682	△ 1,196,682
事務所経費	0	1,341,849	△ 1,341,849
支払手数料	0	851,133	△ 851,133
慶弔費	0	6,300	△ 6,300
管理費支出計	0	7,053,444	△ 7,053,444
③ その他の支出			
法人税、住民税及び事業税	0	221,128	△ 221,128
④ 他会計への繰入金支出			
他会計への繰入金支出	0	0	0
事業活動支出合計	0	13,728,176	△ 13,728,176
事業活動収支差額	0	6,024,785	△ 6,024,785
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入合計	0	0	0
2. 投資活動支出			
投資活動支出合計	0	0	0
投資活動収支差額	0	0	0
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入合計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出合計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
予備費支出	0	-	0
当期収支差額	0	6,024,785	△ 6,024,785
前期繰越収支差額	0	3,644,708	△ 3,644,708
前期繰越収支差額調整額	0	0	0
次期繰越収支差額	0	9,669,493	△ 9,669,493

*社団法人化以降の2008年8月15日から2009年3月31日までの収支計算書は、JACET通信172号に掲載。

会計監査

2008年度の大学英語教育学会(第47期)会計収支決算につき帳簿その他関係書類を監査しましたところ正確、適正であると認めます。

平成21年5月27日

監事 矢野 裕士

監事 橋 心男

【基調講演 1】

Teaching for Global Literacy

Warschauer, Mark
(Univ. of California, Irvine)
Chair: Nishihori, Yuri (Hokkaido Univ.)

It is a great pleasure to speak to such a distinguished organization as JACET. As the main theme of this conference, this presentation will discuss the construct of global literacy and explore three online media to promote it: computer-mediated conversation, blogs, and wikis. This is timely for English teachers in Japan, since the Prime Minister's Commission on Japan's Goals in the 21st Century identified the teaching and learning of "global literacy" as one of Japan's major challenges.

Computer-mediated conversation is one of the oldest, yet still most valuable tools of network-based language teaching, as it puts learners in direct contact with others for authentic communication. The diverse technologies were deployed for computer-mediated exchange and dialogue, from email, synchronous chat, online forums, voice-based exchanges, and videoconferencing, as well as the different contexts within which these technologies can be used.

The blog search engine, Technorati, tracks some 150 million blogs around the world, with Japan one of the world's major sites for blogging. Herring (2005) has characterized blogs as fulfilling a "bridging genre," between the permanence of traditional web pages and the highly interactive and decentered communication styles of e-mail or online forums. The hybrid nature of blogs allows them to similarly serve as a bridge between informal communication and academic writing.

Wikis have eliminated the role of authorship, by submerging the individual writer within a collective editorial process and product. Wikis thus fulfill the vision of social constructionists, who see learning to write as entering a discourse community and mastering its conventions. Flexible wiki tools allow this process to take place at the classroom level, among English learners internationally, or among a broader community of English speakers.

The emergence of these devices mean that teaching for global literacy is more possible than ever before, whether through computer-mediated conversation, blogs, wikis, or other tools.

Hitachi High-Technologies Corporation sponsored the

simultaneous live-feed of Dr. Warschauer's keynote speech using its high-definition video conferencing system "LifeSize" to transmit exceptional high quality images from the UC Irvine. (<http://www.hitachi-hitechvision.com/>)

(文責 西堀ゆり)

【基調講演 2】

B. Pilsudski, Phonograph Wax Cylinders and Sakhalin Ainu

Asakura, Toshimitsu
(President of Hokkai Gakuen Univ.)
Chair: Morizumi, Mamoru
(J. F. Oberlin Univ.)

Dr Asakura is an outstanding scholar and leading authority on optical science in Japan. "What would an optical scientist have to speak about in his plenary speech for JACET?", "Who is Pilsudski?", and "What is a wax cylinder?" These were the questions I had when I was told that Dr Asakura would be a keynote speaker for our conference. When I listened to his speech, however, all my questions were completely answered.

His speech consisted of five parts — (1) Introduction: Phonograph & Wax Cylinders; (2) The Wonders of the Laser Beam: Re-creating Sounds and Words; (3) The Life of B. Pilsudski (pronounced as [piususkil]) and his Study of Wax Cylinders; (4) Sakhalin Ainu Daily Life Preserved on Wax Cylinders: Revival of their Lost Words, and (5) Conclusion : Voices to our Hearts and their Messages.

Initially, he explained by showing us some pictures on the screen of wax cylinders that were used for recording sounds during the period of 1870 to 1930. Then, he went on to refer to the wonders of laser beams recreating sounds recorded on wax cylinder phonographs. Next, he introduced to us the Polish anthropologist, Bronislaw Pilsudski (1866-1918), who was involved in an abortive conspiracy to assassinate Alexander III after he graduated from St. Petersburg University. He was exiled to Sakhalin for 15 years for his part in the conspiracy. After being released from prison, he began to study the culture of Sakhalin Ainu, recording the sounds of the Ainu language and the yukar, or Ainu epic myths onto wax cylinder phonographs. He was so fascinated with Ainu culture that he married an Ainu woman and lived in Sakhalin until 1905. Later he, and then came to Japan and got acquainted with many distinguished persons such as Futabatei Shimei, Ohkuma Shigenobu, and Katayama Sen.

Lastly, Dr Asakura allowed us an opportunity to hear the sounds of the Sakhalin Ainu language recorded on the wax cylinders and concluded his speech by reiterating the importance of recording the language and culture of our indigenous peoples. (文責 森住 衛)

【基調講演 3】

Curriculum Innovations in India — Bandwagon, Applecart and Wheelbarrows!

Padwad, Amol (J.M. Patel College)
Chair: Jimbo, Hisatake (Waseda Univ.)

The Indian higher education context is characterized by huge numbers of learners, immense socio-cultural and linguistic-ethnic diversity, inadequacy of human and material resources and the challenge of balancing between integration and diversity. The HE system is huge and complex, with 367 universities, over 18000 colleges, learners speaking 30 languages, and multiple authorities regulating different strands of education. Though English is mandatorily taught at all levels, the number of effective speakers of English is very small. Normally the English teacher has to deal with large classes, uniform and centrally prescribed syllabus and textbooks, rigid assessment systems and paucity of resources.

In the Indian context the terms ‘curriculum’ and ‘syllabus’ are often interchangeable. The apex body UGC formulates broad curricular framework which is adopted and adapted by HE institutions to widely differing extents. Usually syllabuses are restructured about every four years, but mostly the restructuring amounts to some cosmetic changes in the content.

With liberalization of economy, increasing privatization of various sectors and changing employment patterns, the view about and needs for learning English have also changed significantly. English is now seen as the language of empowerment and career-making and a practical necessity. HE institutions are under pressure to modernize their syllabuses, promote employability of learners and integrate modern technology. As a result, unlike the old largely literature oriented syllabuses, the new syllabuses focus on communication skills, personality development, soft skills and critical thinking. The language content clearly tends towards ESP. They also profess learner-centered, high-technology, interactive and innovative practices. The new curriculums seem to promote more

diversity and flexibility, better connection with the outside world and more scope for using technology and innovative methods.

Three prominent currents seem to underlie these curricular reforms. The first (Bandwagon) represents a trend of uncritical acceptance of many things (“jumping on the bandwagon”) imitating others. Introducing English early, adoption of constructivist paradigm and the CLT approach and the narrowing of curriculum are instances of this kind, whose applicability and relevance to the Indian context is doubtful. The second (Applecart) relates to factors that are likely to severely undermine the effective materialization of the reforms (“upset the applecart”). These factors include the mismatch between the reforms and teacher education policies, the politically motivated and populist decisions and agendas and the inescapable socio-cultural reality. The third (Wheelbarrow) relates to the unchanged ground reality, with teachers continuing their age-old routines (“pushing the wheelbarrows”) without understanding or internalizing the innovations. The reforms don’t seem to reach the grassroots level due to lack of support in resources and training, unchanged teaching-learning conditions and a strong backwash of unchanged examination systems.

In conclusion, the radical changes in the ELT reality and policies have prompted important curricular innovations in higher education, but they are inadequate and have several constraints. Their impact seems limited as they are not matched by resources, teacher training, evaluation system and classroom conditions. (文責 神保尚武)

【特別招待講演】

The Common European Framework in the Language Curriculum: Practices and Issues

Green, Anthony
(Univ. of Bedfordshire)
Chair: Okada, Nobuo (Osaka Univ.)

A world-famous researcher, teacher, and teacher trainer, most actively involved in the area of language testing, Dr. Green covered the following three points in his talk: (1) where the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) comes from, (2) how it can be used in language curricula, and (3) the development of reference level descriptions (RLDs) for English (corpus-based English Profile, designed to provide descriptions of the

grammar, vocabulary, and functions necessary to master language levels) to supplement the CEFR.

Because the CEFR is intended to provide a common basis for the elaboration of language syllabuses, curriculum guidelines, examinations, textbooks, etc., Dr. Green said, it is proving increasingly popular as a means of comparing language learning levels internationally. A series of 'Can Do' statements, intended to describe what language users can typically do with the language at different levels and in different contexts (general, social and tourist, work, study), have been developed.

Although the CEFR is now considered to be a valuable tool for comparing assessment results from diverse systems, more detailed RLDs will be required to adequately demarcate levels for specific languages. Specifically, RLDs for the C levels associated with higher education and professional contexts have not been developed yet. The RLDs now used for those levels are lacking in explicitness, exemplification, and consistency of terminology. There is also little evidence, Dr. Green points out, to support most claims that textbooks or curricula relate to the CEFR. It is becoming clear that different organizations in the world are interpreting the levels in different ways.

In spite of its shortcomings as a universal standard, the CEFR has undoubted value in curriculum renewal. The CEFR offers tools to assist the learner in taking control of his or her learning of multiple languages (plurilingualism) as a lifelong process.

In answer to a question from the audience about the EU's M+2 language policy, Dr. Green said stronger willingness on the part of the national governments to try to promote languages other than English is necessary.

(文責 岡田伸夫)

【招待講演 1】

Meaningful Engagements during Professional Development: The Experience of Malaysian English Teachers

Kabilan, Muhammad Kamarul
(School of Educational Studies
Univ. Sains Malaysia)

Chair: Kawai, Yasushi (Hokkaido Univ.)

Dr. Kabilan's lecture started by stating why he became a teacher. When he entered university, he had not decided who or what he wanted to be. During the practice as a

school teacher, he gradually realized the importance and enjoyment of being a teacher. Then he desired to obtain more opportunities of professional development as a teacher and researcher. Therefore, he thinks that professional development is an integral aspect of a teacher's journey towards enlivening and stimulating good teaching and learning practices in classrooms. The summary of his lecture was as follows: Teachers would be able to stimulate creative teaching by connecting and cascading their experiences of professional development to their classroom practices and in turn they energize students' learning. For this to materialize, the teachers ought to experience meaningful engagements during their professional development, which will assist them in sustaining and creating new teaching methods and approaches. These meaningful engagements will also allow them to grow as an effective and resourceful teacher. This nationwide study (n= 2586) reports the kind of meaningful engagements that were experienced by the teachers during their professional development activities. Among the meaningful engagements emphasized by the teachers are (1) making connections between theories and practices; (2) gaining new knowledge; (3) enhancing existing knowledge and; (4) gaining new experiences working with other people. Some of the major implications of this study are (1) proper planning of professional development activities that consider teachers as active and meaningful entities; and (2) determining the objectives and learning outcomes of the professional development activity from the perspectives of the participating teachers.

(文責 酒井志延)

【招待講演 2】

The College English Program (CEP) at Seoul National University

Song, Mi-Jeong (Seoul National Univ.)

Chair: Kawakami, Noriko

(Kagoshima Immaculate Heart Univ.)

With the late 1990s came a great turning point, the focus of college-level English education in Korea moved from the cultivation of liberal arts knowledge to the development of communicative skills. To meet such changing needs of the students and the society, Seoul National University also reformed its English program into one that is communicatively oriented.

The CEP has four proficiency levels: English

Foundations, College English (CE) 1, College English (two courses of Writing and Speaking) and Advanced English (six different content-based English courses). Freshmen at SNU are placed in the level according to their score on the Test of English Proficiency developed by Seoul National University. The CEP program allows any students from low to high proficiency to upgrade their English.

The major goal of the CEP lies beyond the development of situational or functional daily communication skills. The program aims to equip students with academic skills and abilities to express their ideas and thoughts, to persuade and negotiate with others in discussions, and to exchange opinions on given topics in a logical manner in English.

To investigate the effectiveness of the CE1 course, the performance of 114 students before and after taking CE1 on all four language skills was compared. A series of paired t-tests showed significant differences between the pre-tests and post-tests on all skill areas except for reading comprehension. The survey results showed that the majority of the students were satisfied with the general aspects of CE1; however, most of the respondents were dissatisfied with the course materials and the listening lab sessions as well as the lack of opportunities to speak in class.

Upon reflecting on the results from the study, the CEP replaced the unsatisfactory course materials and has recently changed the listening lab into a speaking lab. Moreover, the program carried out one innovative curriculum enhancement pilot study using PolyCom and Skype technology which linked their students with students at the University of Michigan and the University of British Columbia. This project turned out to be very successful. (文責 川上典子)

【招待講演3】

The Use of Online Portal for Multiple Teaching Purposes

Chua, Hui Leng
(SEAMEO Regional Language Centre)
Chair: Ishikawa, Shin'ichiro (Kobe Univ.)

Singapore is undergoing a period of rapid change in terms of using ICT for education. In 1997, the first master plan for ICT in education was released. In 2008, the third master plan was released. This third plan aims to equip students with critical competence and disposition through

ICT. Over the past decade, the ICT situation has drastically changed. For example, in 1997, only 13,000 computers were used in schools. However, in 2007, as many as 140,000 computers were used for teaching varied subjects, not only computer-related ones.

The presenter currently teaches Chinese language for MBA students coming from all over the world. It is crucial for them to study independently after class. In order to meet the students' self-learning demands, she created various audio and visual materials, power point files, and interactive tasks created with Hot Potatoes.

However, there were several practical problems. First, the students often forget to bring their USB memories to class, which meant that they could not study at home. Second, the interactive quizzes uploaded to the server of Hot Potatoes are deleted after some time.

This is why she has started using the Moodle as a learning management system (LMS). This is very useful and beneficial to students and teachers as well. For example, when students upload their essays to the online forum on the Moodle, they can have rapid feedback from the teacher, as well as receive comments from their student peers.

Her students evaluate this kind of ICT-based teaching and learning very highly. One student says that the online portal allows them to listen to the lessons again and again, thereby giving them a lot of practice and guidance especially in pronouncing the words

Finally, the presenter emphasized the importance of exploring possible ways to further utilize the online portal to enhance students' learning. (文責 石川慎一郎)

【招待講演4】

個別性か普遍性か： 英語表現に見る文化差とその教育

講演者 矢野安剛 (早稲田大名誉教授)
司会 中野美知子 (早稲田大)

チョムスキーのいう生得的なLADも socializationによって言語に触れなければ発動しない。私たちはその社会で共有されている文化社会的基準のもとに言語運用能力や文化リテラシーを身につけ、それは家庭、学校、職場で補強されていく。その意味で私たちは社会的存在であり、言語と文化は切り離して考えられない。だが、英語のように世界中で国内語・国際語として使われ、その80%が非母語話者同士である場合、従来のように英米文化のみとの関連で考えていいのだろうか。私たちが英語で対峙する相手は圧倒

的にヨーロッパ、アジア、アフリカ、南アメリカの非母語話者であり、社会が大学卒業生に期待するのも、そういう人々との異文化間コミュニケーション能力である。このような「国際語としての英語」の話者は母語話者英語への完全な同化を目指さず、自分の母語・母文化のアイデンティティを保持するバイリンガルであり、文化の多様性と相対性を内在化している。彼らは非母語話者英語を排除せず、accommodation skillsを用いて相互理解を深めていく。日本人が目指すべきはこのような「国際語としての英語」ではないか。

日本の大学英語教育の国際化はさまざまな方法で進んでいるが、考慮してほしいことが2つある。1つはいずれ学生が社会に出て要求されるであろう専門別のESPを加味することである。もう1つは、私がEGC (English for General Purposes) とESC (English for Specific Cultures) と呼ぶ表現を区別し、意味的透明性を基に階層化することである。たとえば、knowledge/sleepにdeep/shallowを用いるのは多くの言語で共通なEGCである。また、It's quite easyやIt's not fairは意味的透明性から見てEGCであるが、同じ意味のa piece of cakeやIt's not cricketはESCに属する。EGCの基礎の上に、イギリス人相手にはIt's not cricketなど、個別文化に深く根差したESCを教えていく。聖書やシェークスピアの引用などのESCは英語圏では教養の素養とみなされているからである。同様にイスラム文化圏ではコーランやアラビア文化に基づいたESCも重要な手段となる。

(文責 中野美知子)

【招待講演 5】

Challenges of Teaching and Learning Literature in a Collegiate Environment in Taiwan

Leung, Yiu-nam (National Ilan Univ. Taiwan)

Cheung, Kai-chong (Shih Hsin Univ. Taiwan)

Chair: Aikawa, Masao

(Kyoto Junior College of Foreign Languages)

In many colleges and universities in Taiwan, literary courses such as British and American Literature that used to be required have become elective, and some have even been deleted from their curriculum. In spite of the recent trend, the presenters strongly insist that literature holds strong potentialities for the development of student's critical thinking, cultivation of temperament and acquisition of knowledge regarding the humanities. The presenters' discussion mainly addressed the challenges met by both teachers and learners in literary courses and solutions for overcoming those challenges.

The presenters stated that one main challenge in offering basic literary courses is to avoid careful translation and line-by-line explanation of the text of many materials. As the goal of these courses is basic comprehension and awareness, students are encouraged to read the original text once before teacher's in-class lecture, and then summarize the plot in English and Chinese translation.

As for literature theory courses such as Literature Appreciation and Literary Theory, a simple exercise is carried out to encourage students to express their initial and final impressions on an assigned text and to discuss reasons for their preference. It helps students overcome their discomfort and build confidence in having the ability to comprehend the text, express their own opinions, and defend their arguments with supportive evidence.

Advanced literary courses such as Asian American Literature and the Postcolonial Novel require students and teachers to take different approaches because of the necessity to attain high degrees of comprehension. A small seminar offers them opportunities for discussion and close reading to practice identifying the literary elements of individual texts and their characteristic traits.

Finally, the presenters insisted that teachers should make strenuous efforts to create a relaxed atmosphere and enhance students' active participation in the classes by avoiding teacher-centered instruction.

(文責 相川真佐夫)

【招待講演 6】

The Korean Flagship Program: Implications for Innovation in College English?

Kim, Youngkyu

(ALAK, Ewha Womans Univ.)

Chair: Hiroki Yamamoto

(Seinan Jogakuin Univ.)

Dr. Kim began with an introduction of "The Flagship Program Initiatives," which were initially proposed to the U.S. Congress in 2000 by the National Security Education Program to initiate specialized advanced foreign language programs. They were mainly intended to train American graduate students to develop their professional proficiency in such foreign languages as Arabic, Chinese, Korean, Russian, etc. Those with not only a full command of each language but also a good understanding of the culture and society of L1 speakers of each particular

language are critically needed, even for the U.S. national security purposes. In these domestic contexts, the Korean Flagship Program (KFP) got started in the University of Hawaii at Manoa, with Dr. Kim involved as one of Korean native speaker instructors from its inception.

During the first academic year, intensive, as well as task-based, instruction was offered in Korean to a competitively selected group of graduate students majoring in International Relations, Business, Law, and so forth. During the second year, intensive immersion was implemented, coupled with internship experiences in Korea. The main program features included (1) the proper use of domain experts on history, international business/trade, the past and present relationship and diplomacy between Korea and the U.S., etc.; (2) the incorporation of task-based criterion-referenced performance tests into the curriculum; (3) the focus on form in daily instruction; and (4) the frequent use of technology for web-mediated communication between instructors and students. Based on the results of needs analysis, four basic curricular options were provided, with emphasis on task-based language teaching, internships in the local communities in Korea, and study-abroad programs prepared by Korea University in Seoul, Korea.

Last of all, Dr. Kim provided us with some insightful ideas of how innovations should be attained in regular college English teaching. Finally, based on his involvement with the KFP, he strongly emphasized the importance of identifying each FL learners' needs, coordinating the program well with their needs, and making clear what can be acquired through their learning processes.

(文責 山本廣基)

【全体シンポジウム】

College English Curriculum Innovation in the New Age of International Exchange: Latest Reports from Dynamic Asia

Chair: Nishihori, Yuri (Hokkaido Univ.)
Panelists: Kabilan, Muhammad Kamarul
(Univ. Sains Malaysia)
Nakano, Michiko (Waseda Univ.)
Padwad, Amol (J. M. Patel College)
Song, Mi-Jeong (Seoul National Univ.)

The Internet's impact has effected great changes in the English curricula at the level of higher education, with many new types of exchange programs showing a demand

for global communication in English. We English teachers are all being challenged like never before to produce new approaches to meet this demand for global communication.

This symposium brings together leading scholars from Asia to focus on how new forms of communication are transforming our notions and practices in various aspects of college English education. The panelists discussed this phenomenon from different perspectives, dealing with both failures and successes. Their reports were really dynamic in the sense that these discussions covered political, social, institutional and national contexts.

Prior to the panel talk, via video-message, Dr. Mark Warschauer encouraged us to discuss these issues for better language teaching. His message is most appropriate for our discussion, since we share the same idea of NBLT (Network-based Learning Teaching) to create a learners' community across the globe.

Dr. Kabilan reported the latest movements of language teaching and teacher training in Malaysia, entitled "The Impact of ICT on Teaching and Learning of English in Malaysia." He discussed necessary conditions for nationwide ICT initiatives. Dr. Padwad gave his latest report from India, entitled "Revisiting College English - Whither Change?" He discussed appropriate contents for college English programs of the present age.

Dr. Nakano illustrated a case study of Waseda University, entitled "Curriculum Innovation, ICT and International Standards." She talked about quality management and international standards for successful curriculum innovation. Dr. Song reported about Seoul National University, entitled "Incorporating Technology in the College English Curriculum: Using International Video Conferencing and Skype Chat." She focused on the effectiveness of utilizing these tools.

From the panelists' detailed reports and discussion with the floor, the audience realized how deeply these issues have come to influence our research and practice of English language education. (文責 西堀ゆり)

【シンポジウム ESP 1】

英語教員と専門教員のコラボレーション —知的財産分野におけるESPカリキュラム 開発事例を中心に—

司会 井村 誠 (大阪工業大)
提案者 深山晶子 (大阪工業大)
椋平 淳 (大阪工業大)
井村 誠 (大阪工業大)

専門分野の教員とのコラボレーションは、ESPを行う上で不可欠の要素であると言われるが、これは容易に実現できることではなく、ある意味でESPの普及を難しくしている要因のひとつにもなっていると思われる。本シンポジウムでは、2007～2008年度の科研費プロジェクトで行ったコラボレーション事例を紹介すると共に、ESP教員と専門分野の教員の役割分担モデルを提示し、ESP教員の役割がいかにあるべきかという問題を提起することによって、今後のESPのさらなる普及・発展へ向けた議論の場を提供した。

本プロジェクトでは、当初より専門分野の教員(元特許庁審判長)が連携協力者として加わり、英語教員と共同でESPカリキュラム開発へ向けた研究を行った。「知的財産分野におけるESPの教授法および教材開発に関する基礎研究」基盤研究(C) 課題番号19520528) (1) ニーズ分析 (2) ジャンル分析 (3) フィールド調査 のそれぞれの分野におけるコラボレーションの実践を通じて、ESP教員と専門分野の教員の「棲み分け領域」が次第に明らかとなった。また、コラボレーションは双方向性のものであり、一方が「もらう」ばかりでは成立しない。ESP教員の役割としては、コンテンツに関する専門知識を有する必要はないが、専門分野のニーズとジャンル特性を知り、英語、教育、コミュニケーションを専門とする立場から、専門分野で通用する英語の運用能力を育成するために有効な教育を提案し、提供することができなくてはならない。(文責 井村 誠)

【シンポジウム ESP 11】

職場における英語使用者が抱く英語基礎力像 (ESP北海道企画)

司会 柴田晶子 (専修大北海道短大)
提案者 坂部俊行 (北海道工業大)
竹村雅史 (北星学園大短大部)
山田 恵 (北海道薬科大)
内藤 永 (旭川医科大)

このシンポジウムは、2008年度にESP北海道が実施し

た『仕事で使う英語と英語の基礎に関するアンケート調査』の分析結果を報告し、調査対象者が抱く英語の基礎力像を探るとともに、今後の研究への示唆を求めるために、企画されたものであった。

はじめに、今回の調査の方法について、調査項目設定のための予備調査と、仕事での日常的な使用者選別のための予備調査を含めて、その具体的方法を報告した。また、分析に際して、不正回答者を厳密に排除することの必要性や、調査設計上の反省点などを説明した。

次に、本調査で得られた455の有効回答から、英語の基礎力としてイメージされている「学習項目」や「技能」の重要度と、それらの「到達度」について、単純集計結果を報告した。さらに、業務上の英語使用背景と、基礎力として考えられている各要素の到達度レベルなどについて、クロス集計、多変量解析を行った結果を報告した。これらの分析結果から、職場での英語使用の基礎力としては「高校レベル」がイメージされており、また、使用度が高いほど高い到達度を要求していることなどが、大まかな傾向としては見られることを報告した。

最後に、使用背景により「基礎力」の具体的なイメージが異なっている可能性や、「基礎力像」の単純化の危険性を示唆した。フローアからも、質問・意見だけでなく、ニーズ分析等のデータ集積の必要性など、今後の研究への提案も出され、意義深いシンポジウムとなった。

(文責 柴田晶子)

【シンポジウム EAP 1】

コーパス分析に基づく医学・看護英語 ライティングコースウェアの開発

司会・提案者 横山彰三 (宮崎大)
提案者 鈴木千鶴子 (長崎純心大)
安浪誠祐 (熊本大)
川北直子 (宮崎県立看護大)

平成17年度から20年度までの4年間にわたって行った科学研究費補助金(基盤研究B)による研究課題「コーパス分析に基づく医学・看護英語リーディング・ライティング教育システムの構築」の研究成果を報告した。具体的にはESP(職業・目的別英語教授法)理論およびコーパス言語学に基づいて、医学・看護分野の英語ライティングとリーディング教育システムの開発を最終目標とした。本研究に於いては電子化されたPub Med Centralをターゲットとし、ほぼ全てのジャーナルについて電子ファイルとして収集しコーパスを作成した。コーパスの規模はおおよそ1000万語。4つのサブコーパスとして「生命科学」「臨床外科学」「公衆衛生学」「看護学」に分類し全ての医学英語論文は電子テキスト化されてデータには品詞タグおよび論文の修辭段

落に応じた段落タグを付与した。これにより、分野や修辭的段落ごとの言語特徴を探ることが可能になった。4分野ごとに語彙の頻度統計、Wordsmithを利用したキーワード分析を行った。また各分野の修辭段落ごとに動詞、助動詞などの頻度順リストを作成した。また得られた動詞リストとAcademic Word Listとの重なりを検証した。コーパスデータをもとにウェブで利用可能な医学英語論文コンコーダンサーと医学英語論文執筆者のためのライティング用コースウェア（動詞編・modal編）を構築した。このコースウェアは前述のコンコーダンサーと併用する教師存在を想定した。（文責 横山彰三）

【シンポジウム TE 1】

小学校外国語（英語）活動のための教員養成

司会 古家貴雄（山梨大）
提案者 高木亜希子（大阪教育大）
粕谷恭子（東京学芸大）
建内高昭（愛知教育大）
本田勝久（大阪教育大）

2011（平成23）年度より、小学校外国語（英語）活動が必修化されることになり、小学校外国語（英語）活動に対応できる指導者の育成は必須の課題である。従って、今後、全国の教員養成課程で小学校英語に対応できるカリキュラムの充実を図り、質の高い小学校教員を育成することが重要である。

本シンポジウムでは、公立小学校の外国語（英語）活動の現状を踏まえ、教員養成系大学における小学校英語教員養成カリキュラムについて報告し、これからの小学校英語教員養成の在り方を考えた。最初に、本シンポジウムにおける問題の所在について概観した後、小学校外国語（英語）活動に求められる教員の資質について、現職教員へのアンケート調査などを参照しながら議論を行った。次に、全国に先駆けて小学校英語教員養成コースを設置している東京学芸大学における小学校英語教員養成の取り組みと愛知教育大学における教育現場との連携によるカリキュラム開発について報告した。また、来年度のコース開設に向けてカリキュラム開発を進めている大阪教育大学のこれまでの取り組みとその成果を報告し、小学校英語に関する科目を必修化するための教員養成カリキュラムの編成と、今後の教員養成の在り方を議論した。各提案者の発表の後、参加者と提案者との間で活発な意見交換が行われ、具体的かつ建設的な意見や提案も出され、今後の教員養成の在り方について十分な示唆を与える有意義なシンポジウムであった。

（文責 古家貴雄）

【シンポジウム TE 2】

英語教員の研修と評価 —教育委員会への調査結果に基づいて— （教育問題研究会企画）

司会・提案者 今村洋美（中部大）
提案者 清田洋一（明星大）
中山夏恵（共愛学園前橋国際大）
大崎さつき（創価大）

教育問題研究会では、2007年度に現職教員対象に免許更新制に関する全国調査を実施した。その結果を踏まえ、以下の2項目の策定を目指すため、2008年度に全国の教育委員会にアンケート調査を行った。

1. 英語教員研修の全国統一的ガイドライン
2. 英語教員評価の全国統一的な基準

アンケートでは、上記の目的に沿って、次の4つのカテゴリーを設定した：英語教員対象の免許更新講習・評価、英語教員研修、英語教員の研修評価、英語教員の段階別評価。

本シンポジウムでは、そのアンケート結果を報告するとともに、その結果から導き出した提案について報告した。

1. 「英語教員研修の全国統一的ガイドラインの策定の要件」として次の3点を確認した。

- ・研修評価を教員評価制度に入れる
- ・大学と教育委員会などとの連携
- ・経験年数や指導力に応じた研修プログラム

2. 「英語教員評価の全国統一的な基準策定の要件」として、段階別基準の作成には、今後更なる研究が必要なことなどを確認した。（文責 今村洋美）

【シンポジウム TE 8】

Initial Teacher Education for English Teachers in Japan: Reappraising the Roles of Tertiary Education Institutions

Chair/Presenter: Ishida, Masachika (Seisen Univ.)
Presenters: Usui, Yoshiko (Dokkyo Univ.)
Asaoka, Chitose (Dokkyo Univ.)

In the symposium, we presented the results of the nation-wide survey, document analysis such as syllabi and the follow-up questionnaire survey, focusing on the status quo and teacher educators' beliefs. We pointed to some critical issues at hand and then, discussing with the floor to which direction future ITE for English teachers in Japan

should ideally go. We focused on four areas from the questionnaire: ① teaching style of the methodology course; ② content areas of emphasis; ③ English proficiency prerequisites; and ④ courses for English language at elementary schools. We compared the results for ①, ② and ④ from this survey with the results from the survey conducted about a decade ago in 1996. We brought up some critical issues such as how to raise the level of qualifications and abilities of trainees, how to prepare prospective teachers to teach English through English or to teach elementary school children English as stipulated in the new course of studies announced by MEXT last year. What we can and should do to empower the training program under the current ITE situation, what content of teacher educators' professional expertise can and should be transmitted to trainees, and what benchmarks of teaching performance can and should be established to check the progress of trainees were also discussed. (文責 石田雅近)

【シンポジウム TE 9】

言語教師認知の効果的なリサーチ方法 〈言語教師認知研究会企画〉

司会・提案者 笹島 茂 (埼玉医科大)
提案者 江原美明 (県立外語短大)
西野孝子 (法政大)
田辺尚子 (安田女子大)
小嶋英夫 (弘前大)

本シンポジウムは、実践に関わる言語教師の認知を探る手法をテーマに行われた。質的調査の類型と信頼性、妥当性についての考察に続き、英語活動に初めて取り組む小学校教諭の認知を探った日誌分析、コミュニカティブ・アプローチに関する日本人高校教師の信条と実践の解明をインタビュー結果の文脈中での読み込みに求めた「語り」の分析、英語で授業を行なうことに対する高校教師の意識を探った質問紙調査とエスノグラフィー、教員養成・教師教育プログラムに於けるポートフォリオや共同生成的アクション・リサーチの活用について提案、報告があった。討論では、アクション・リサーチの前提条件として理論や研究手法への習熟が重要である点、質問紙調査では、参加者の客観的判断を引き出すために、どのような状況が前提での質問かを明確にする必要がある点等が確認された。質的研究手法としての語り（ナラティブ）についても意見が交わされた。

多様な研究手法の長所とその限界を理解し、教師認知研

究の成果を教育的活用はどう結びつけるかが、今後の課題ではないか。(文責 江原美明)

【シンポジウム WRT 1】

An Analysis of Argumentative Writing from Japanese Senior High School Students

Moderator/Presenter:

Kimura, Tomoyasu
(Nagoya Univ. of Foreign Studies)

Presenters: Sato, Takehiro (Nagoya Univ.)

Suzuki, Toshiko (Seirei Junior and Senior High School)

Suzuki taught an advanced class in English of the 12th grade. The class consisted of 90-minute long double periods. Argumentative writing, which was “debate writing” on the death penalty, was introduced around the end of the second year of a successive two-year English course, because learning how to “think” and organize their ideas might be beneficial for the students after their graduation.

Argumentative writing was analyzed from free-writing perspectives. Sato, who adopted dialogue journal writing to promote free writing, compared his university students with Suzuki's in their writings. He found differences between the two and concluded that his students were not as persuasive as Suzuki's, citing a lack of dialogic exchanges as one reason.

Kimura, who once taught debating, analyzed Suzuki's argumentative writing. Three criteria of persuasiveness, frequent use of the devil's advocate and careful revision were adopted for his analysis. Two samples were examined. One was found to follow a general rule of argumentative writing, while the other was not. The difference seems to have come from frequent use of the devil's advocate.

The symposium received five questions. Three questions were asked about Suzuki's class: Class size, assessment of argumentative writing, student responses to a change from reading to writing. Another question was a suggestion for the use of English for argumentative writing. And still another suggestion was made for the use of a readability criterion by Kyoto Notre-Dame University. (文責 木村友保)

【シンポジウム SLA 1】

もっと反応時間データの活用を!! : 研究および教室でいかに使うか

司会 門田修平 (関西学院大)
提案者 赤松信彦 (同志社大)
中西 弘 (神戸大 (非))
長谷尚弥 (関西学院大)

本シンポジウムは、第二言語研究における反応時間データの意義を考え、具体的に研究および教育実践に、いかに活用できるか検討することであった。

提案1 (門田) は、音韻、語彙、統語、意味などの各処理モジュールが十分な自動性を達成していない状態にあると考えられるL2処理において、反応時間がいかに活用できるか導入的検討を行った。

提案2 (赤松) は、バイリンガル・レキシコンの探求という観点から単語認知研究について報告した。特に、語彙知識を理解する上で重要な深さとアクセスという2つの要素において、単語認識の自動化が示唆する点について述べ、それらの研究において、反応時間が果たす役割の重要性について論じた。

提案3 (中西) では、ワーキングメモリ容量が各種言語処理に及ぼす影響について、反応時間の指標を元に報告した。反応時間により可能になったことは、①妥当なWM容量の測定、②WM容量大・小群間で言語処理にかかる処理負荷量の比較、③処理負荷のかかる個所の特定、であった。

提案4 (長谷) は、反応時間 (タスク時間) の計測という概念を教室に持ち込むことの意義と具体例について述べた。リーディング指導を例に取り、時間を計測することで言語処理 (下位処理) の自動化を可視化することができ、さらに、そのことを学習者自身に実感させるメリットについて論じた。 (文責：門田修平)

【シンポジウム VOC 1】

多次元の語彙テストによる英語能力の推定

司会・提案者 相澤一美 (東京電機大)
提案者 清水伸一 (安城学園高)
小泉利恵 (常磐大)
杉森直樹 (立命館大)

最初にプロジェクト全体の枠組みと本研究の目的について説明を行った (相澤)。研究の目的は、サイズ、構成、アクセス速度という3次元で語彙知識を測定するテストを開発し、言語能力全体をどのように説明できるかを明らかに

にすることである。続いて、3次元の語彙知識を測定するオンライン語彙テストシステム (J8VST, LOT, LEXATT) の開発の概要と今後の課題について説明があった (清水)。受験者データの漏洩防止、オンライン上でのパフォーマンスの向上、受験結果のデータ処理等、様々な解決すべき問題などが報告された。

事例研究1として、語彙テストとTOEIC Bridgeによる、語彙力とリーディング力及びリスニング力の結果の報告があった (杉森)。アクセス速度の結果は、学習者の語彙サイズやリーディングの得点と弱い相関があった。しかし、語彙構成の得点は、他の2種類の語彙テストの得点やTOEIC Bridgeの得点とは相関が見られなかった。

次に、事例研究2として、語彙テストを独立変数、TOEICリスニングとリーディングの得点を従属変数とした、重回帰分析や共分散構造分析の報告があった (小泉)。語彙サイズで、TOEICリスニングとリーディング得点が半分子予測でき、構成とアクセス速度は予測にあまり貢献していなかった。

フロアからは、用語の不統一に関する質問や、TOEIC Bridgeの被験者の特徴に関する質疑が出され、今後の研究の方向性に対して参考となる意見交換ができた。

(文責 相澤一美)

【シンポジウム CUR 1】

English Language Education and Peace Building

Chair: Asakawa, Kazuya (Tokeigakuen Univ.)
Presenters: Ikuta, Yuko (Bunkyo Univ.)
Shiozawa, Yasuko (Bunkyo Univ.)
Smith, Craig
(Kyoto Univ. of Foreign Studies)

The symposium on English Language Education and Peace Building was held by Education for International Understanding/Global Education SIG. Following the Chair's opening, the significant concepts of ESD and three papers were introduced. Yuko IKUTA (Bunkyo Univ.) who just arrived from Uganda and Kosovo, presented her work camp by Japan International Food for the Hungry with students from various Japanese universities. The Kosovo tour was done for her universities. Those exposures are vital opportunities to cultivate students' capacity. Yasuko SHIOZAWA (Bunkyo Univ.) introduced her experience of her participation in PETA, the Philippine Educational Theatre Association work shop. It is beyond drama skills training, engaging social issues. Craig Smith (Kyoto University of Foreign Studies) presented on activities his

students initiated. His students formed their own groups after participating in Habitat for Humanity work including fund generation. He also supports Model United Nations by students. Mostly presentations are about extra-curricular work that encourages service learning. Communication skills play a vital role. There is always some risk but such activities would offer valuable experience, which there is much to gain from for students' growth. We need to be much informed in such activities offered by CIEE and so on. In the end, Mr. Asakawa mentioned on HOPE perspectives from "Tales of Hope II" by ACCU, the Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO.

(文責 浅川和也)

【シンポジウム CAL 4】

小学校英語必修化に向けての ICT活用の意義と期待される効果

司会 泉恵美子 (京都教育大)
提案者 生馬裕子 (大阪教育大)
福智佳代子 (神戸海星女子学院大)
吉田晴世 (大阪教育大)

本シンポジウムのねらいは、2011年度より小学校高学年で必修化される外国語活動を成功させるために、ICTがどのように関わられるのか、その意義と期待される効果について、様々な事例を紹介しながら考察することであった。主な内容として、まず生馬先生が、ICT教材「ATR CALL システム」の取組みについて、児童の様子と成果も踏まえ発表された。次に、福智先生が、英語活動を効果的にサポートできる電子黒板を使った活動のあり方について、拠点校の取り組みを指導案、ビデオを示しながら提案された。最後に、吉田先生が教員養成・研修において、Podcast用教材の開発とその利用方法について、HPや作品も示しながら紹介された。その後、フロアとの意見交換が行われたが、ICT教材でのリズム課題や強弱音節の違い、音韻などの指導内容、学年による音声・文字指導や難易度の傾斜のつけ方、学習実施時間の違いによる影響、電子黒板などを用いて音響的・視覚的に刺激の強いものを長期的に与えることの影響、Podcastの部外者によるアップロードの方法、コンパクトな機器を用いて、簡単に教材をアップできるのは研修に良い、参考になったなど多くの質問や意見が出された。英語に自信のない担任教師でも、ICTの利点や欠点を理解した上で、ねらいに応じて効果的に用いることで負担を軽減し、児童に良質の英語をインプットすることが可能となる。今後対面指導を補うものとして、大いに活用できると考えられるが、そのためには、教員研修が不可欠であろう。

(文責 泉恵美子)

【シンポジウム OTH 1】

英語スピーチアクト・コーパスを活用した 言語機能指導の試み

司会 鈴木利彦 (早稲田大)
提案者 水島梨紗 (北海道大)
豊田春賀 (上智大)

本シンポジウムでは、「英語スピーチアクト・コーパスの構築とその大学英語教育に於ける活用」プロジェクト(日本学術振興会科学研究費補助金: 課題番号 18820028、早稲田大学特定課題研究助成費: 課題番号 2008A-840、2009B-083)に関して、これまでの研究結果と今後の可能性に関して報告と討議を行った。まず司会者・第一発表者の鈴木利彦(早稲田大学)が、(1) 研究プロジェクトの概要、(2) 語用論的要素を英語教育に取り入れることの意義と自他の先行研究、(3) NHKラジオ放送(おとなのためのGrammar講座〈スピーチアクトコーパスから〉)の紹介、(4) InvitationとSuggestionのデータ分析結果、に関して紹介した。第二発表者の水島梨紗(北海道大学)は、「大学英語クラスにおける教育実践例」として2009年度春学期に上記「英語スピーチアクト・コーパス」中の「招待・勧誘」(Invitation)データを使用して行った指導に関し、(1) 指導の概要、(2) Receptive skillの育成とテスト結果、(3) Productive skillの育成とテスト結果、(3) Autonomous learningを目指したグループ学習の試み、(5) 受講生からのプロジェクトに対する感想、に関して報告を行った。第三発表者の豊田春賀(上智大学)は、「Focus on FormとFocus on Meaningの英語授業: スピーチアクト・コーパスを利用した提案・アドバイス(suggestion)の指導」というテーマで、(1) 先行研究、(2) 研究の概要、(3) 現時点での研究結果(Receptive skill / Productive skillに関して)、(4) 今後の課題、について報告を行った。三名の報告後には討議を行い、出席された方々と活発に質疑応答・意見交換を行い、本プロジェクトの意義、課題、今後の方向性を模索した。

(文責 鈴木利彦)

【シンポジウム OTH 15】

日本の英語教育へのCEFR導入における課題：
異文化適応能力の育成に向けて
〈待遇表現研究会企画〉

司会・提案者 岩田祐子（東海大）
提案者 大塚容子（岐阜聖徳学園大）
重光由加（東京工芸大）
大谷麻美（京都女子大）
村田泰美（名城大）

このシンポジウムでは、日本の英語教育にCEFRを導入するにあたっての留意点を社会言語能力・言語運用能力に焦点をあてて考察した。

岩田が、CEFRについてその理念を中心に紹介した後、大塚は、日本人が英語でコミュニケーションを図ろうとすると、どのような問題が生じるかを検証するために、まず母語である日本語のコミュニケーションの特徴について述べ、それを踏まえて英語のコミュニケーションの特徴を示した。

重光は、日本語母語話者と英語母語話者が英語で会話した際のビデオデータ分析から、文法・語彙・リスニング力が豊かな日本語母語話者であっても、社会言語能力・言語運用能力が備わっていないためコミュニケーションで誤解、不快感を与えるなどの支障が生じることを明らかにした。

大谷は、CEFRで実際に社会言語能力・言語運用能力がどう扱われているか、また、それらを日本の英語教育に応用する際の利点と問題点を分析した。その結果、導入に際しては、日本と欧州との文化的距離を考慮した上でいくつかの課題があることを指摘した。

村田は、CEFRに準拠しているKey English Test (KET) およびPreliminary English Test (PET) 用のテキストの中に社会言語能力に関する内容が含まれているかを分析し、KET、PETとも数か所の記述または練習問題があるのみで社会言語能力が極めて軽視されていることを述べた。

（文責 岩田祐子）

【シンポジウム OTH 16】

大学生の英語基礎学力と教材
— 賛助会員へのアンケート調査から —
〈教材研究会企画〉

司会・提案者 高橋貞雄（玉川大）
提案者 鈴木彩子（早稲田大（非））
山崎朝子（東京都市大）
大山中勝（千葉大）
見上 晃（拓殖大）

現在、大学生の基礎学力（英語基礎学力）が問題視されており、学生や教員を対象にしたアンケート調査、TOEICやTOEFLを利用した到達度測定などがさまざまな場面で行われている。教材研究会では、JACETの賛助会員を対象にしてアンケートを実施した。大学の授業担当者や教材制作会社は互恵の関係にあり、大学のニーズが教材会社に伝わり、そこで制作された教材が授業で活用される。そこで、教材会社が教材をとおして学生の英語力をどう思っているか、「やさしい教材」をどのような基準で判断しているか、どのような教材が売れているか、といったことを調査した。その結果を踏まえて、高橋がリメディアルとコンテンツのとらえ方、鈴木が賛助会員の英語力に関する意識、山崎がやさしい教材の判断基準、大山が最近の教材のジャンル別傾向、見上が教科書以外の教材、に関してそれぞれ提案を行った。ディスカッションでは、教材会社からやさしい教材だけが売れているわけではない、むしろ二極化が進んでいるのが実態である、といったコメントが得られた。

（文責 高橋貞雄）

【特別委員会報告】

ICT活用授業と授業評価～1対1対応の遠隔授業と多地点遠隔授業、英語発信力の自動判定、個人差を考慮できるICT活用
〈ICT調査研究特別委員会企画〉

司会 上田倫史（目白大）
指定討論者 見上 晃（拓殖大）
提案者 中野美知子（早稲田大）
大和田和治（東京音楽大）
筒井英一郎（広島国際大）
近藤悠介（立命館大）

本シンポジウムにおいては、ICTを活用した教育へのさまざまなアプローチの例を報告した。まず、中野氏よりテレビ会議システムを活用した多地点における授業の実践例

の報告と、そのような環境における実践的スピーキング、プレゼンテーション能力やソーシャルコミュニケーション能力を高めるための支援についての報告があった。さらに、遠隔教育の授業評価のためのアンケートの実施とその結果についての報告もなされた。

筒井氏からは学習者のニーズ、学習動機等を考慮したアンケートに回答することにより、学習者に適した英語コースの推奨や学習アドバイスを行うシステムについての報告があった。また、ICTを授業に導入した場合の生徒ひとりひとりに学習のフォローアップを行う授業展開の事例についての報告があった。

近藤氏からは、第二言語音声データベースに基づいた英語発話能力を測るシステムの開発の報告、及びそのシステムを実際に使い英語発話能力をどのように測るのかのデモが行われた。

最後に、見上氏からそれぞれの報告の総括がなされ、今後ICTが語学教育に多方面にわたり広がっていく可能性は更に高まっていくであろうということが述べられた。

ICTのさまざまな活用実践例を示した本シンポジウムは、次回以降は各分野にフォーカスをおいたほうがよいという意見を頂き、今後のICT調査研究特別委員会としての活動にもアドバイスを頂き、シンポジウムは盛会のうちに終わった。(文責 上田倫史)

2009年度 JACET 賞

JACET賞選考委員会では昨年12月に審査を開始し、以下の2点(学術賞、実践賞)を2009年度JACET賞候補とする推薦案を理事会に提出しました。本年6月の理事会でこの案が承認され、本年度受賞者が決定し、去る9月4日の全国大会で授賞式が挙行されました。受賞されたお二人には心からお慶び申し上げます。

1. 学術賞

大谷泰照氏(名古屋外国語大学教授、大阪大学名誉教授、滋賀県立大学名誉教授)

業績名:『日本人にとって英語とは何か?異文化理解のあり方を問う』大修館. 2007.

授賞理由:本書は、大谷氏の長年の教育経験と研究成果に基づき、日本の英語教育が抱える重要な今日の問題が扱われている。それらの根幹に関わる原因を深く掘り下げ、歴史的、国際的視座から論考が加えられた好著である。

2. 実践賞

中野美知子氏(早稲田大学教授)

業績名:「早稲田大学における革新的英語教育プログラム、

及び海外諸大学連携によるIT英語教育諸活動の開発、導入、実践」

授賞理由:中野氏は、博学的な言語理論や英語学習、それにIT関連の専門知識を活かし、ネットワーク型異文化交流プログラム、海外の大学と連携した国際交流プログラムなど、多くの独創的英語教育プログラムを実践し、本学会を含む国内外の多くの学会等でこれらを紹介してこられた。

3. 新人賞

該当者なし。

(文責 岩井千秋)

【大会記録】

1. 第48回大会発表件数報告

今大会の発表件数は基調講演3件、特別招待講演1件、招待講演6件、研究発表34件、実践報告24件、事例研究10件、シンポジウム15件、ワークショップ1件、ポスターセッション7件、賛助会員発表9件、特別委員会報告1件、私の授業2件、全体シンポジウム1件の合計114件。支部企画は事例研究4件、ポスターセッション52件の計56件であった。

2. 発表キャンセル者

研究発表 Writing 4 D41: 志村美加氏 <9/4連絡>
実践報告 Listening 2 D40: 佐々木有紀氏 <9/2連絡>
実践報告 Reading 2 D41: 尊田望氏 <9/4連絡>
支部企画ポスターセッション: 眞田亮子氏 <9/3連絡>
岡崎弘信氏 <8/31連絡>

第49回(2010年度) JACET全国大会

開催期間: 2010年9月7日(火)、8日(水)、9日(木)
開催校: 宮城大学大和キャンパス
住所: 〒981-3298 宮城県黒川郡大和町学苑1番

大会テーマ:

「明日の学習者、明日の教師—大学英語教育における学習者と教師の自律的成長—」
Tomorrow's Learners, Tomorrow's Teachers:
Autonomous Development in College English Language Learning and Teaching

大会テーマ主旨:

我が国の大学英語教育において、「教え中心」から「学び中心」へのパラダイム・シフトが進行しつつあるように

感じられる。しばしば「知識の権威者」と見受けられる大学教師は、「学び中心」のクラスで学生と共に知識を構築する新しいアプローチの開発を期待されるであろう。英語教育の革新のために、教師は協働的・省察的授業実践に取り組むことを要するが、これには、相当な研修・職能成長と同様に理論・リサーチの統合的な応用を心がけることが含まれる。専門的知識、教育学的スキル、人間関係スキル、個人的特性もたえず磨かなければならない。優れた教えは、言語学習者がどのようにして学ぶか、教師はどうすれば学習者オートノミーの育成を助けることができるか、に対する確かな理解に基づく。ただし、文化や教育的コンテキストが異なれば、オートノミーの解釈も異なると思われる。本大会は、参加者同士で国内外の多様な教育現場における理論・実践・リサーチを共有し合い、明日の学習者・教師が自律的成長をより効果的に育むことができるように支援するうえで、大いに意義ある機会となるであろう。

English language teaching (ELT) in Japanese colleges seems to be in the midst of a paradigm shift from teaching-centeredness to learning-centeredness. College teachers, who are often seen as “authority figures of knowledge,” are likely to be expected to develop a new approach to ELT in which knowledge is jointly constructed by students and teachers in learning-centered classrooms. Innovation in ELT will require teachers to engage in collaborative and reflective teaching practice, which involves the complex application of theory and research as well as considerable teacher training and development. Continuous refinement of technical knowledge, pedagogical skills, interpersonal skills, and personal qualities will also be needed. Good teaching must be based on understanding how students learn and how we can help them develop autonomy in language learning, but autonomy may be interpreted differently in different cultures or contexts. This conference will be an important opportunity for participants to share their own theories, practices, and research in a variety of ELT contexts inside and outside Japan, and to help tomorrow’s learners and teachers to promote their autonomous development more effectively.

全国大会運営委員会からのお知らせ

2010年度第49回全国大会では、第48回大会に引き続き「発表募集部門」の“研究発表”につきましては英語での発表を原則とし、その他の発表部門でも英語での発表を推奨いたします。これは2011年度JACETが開催します第50回記念国際大会を見据えての事であり、今後の全国大会でも踏襲してまいります所存です。また第49回全国大会では発表応募がオンラインでの応募となる予定です。後日学会ウェブサイトにて詳細をご覧ください。会員の皆様にはよろしくご理解のほどを御願い申し上げます。

全国大会運営委員会担当理事
山岸信義（日本教育大学院大）

編集後記

全国大会運営委員会担当理事、大会運営委員長、大会特集号編集委員、事務局の皆様のご指導とご尽力を賜り、今年度も無事に「JACET通信全国大会特集号」を発行することができました。原稿をご執筆くださった先生方、大変お忙しいなかご協力いただきありがとうございました。また今年度は、大会実行委員会の先生方のご尽力で基調講演・招待講演・特別招待講演・全体シンポジウムの音声・映像データをご準備いただき、原稿作成の大きな助けとなりました。この場をお借りして、大会特集号発行にご協力くださいましたすべての皆様に、心よりお礼申し上げます。

編集委員 ○飯島優雅（獨協大）
中西千春（国立音楽大）
羽井佐昭彦（相模女子大）
Schneider, D.E.（東京女子大）

2009年11月28日発行

発行者 社団法人大学英語教育学会（JACET）
代表者 森住 衛
発行所 162-0831 東京都新宿区横寺町55
電話 (03) 3268-9686
FAX (03) 3268-9695
E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp
印刷所 228-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12
有限会社 タナカ企画
電話 (046) 251-5775